

ほっとらいん
ふろむ
ほんごう

根拠に基づくケアマネジメントを 実現する「インターライ方式」

ダイヤ財団フォーラム「根拠に基づいた
ケアマネジメントの実現」(主催：公益財
団法人ダイヤ高齢社会研究財団) が11月
19日、丸の内マイプラザホール(東京都
千代田区)にて開催された。本フォーラ
ムは、高齢者へのアセスメント手法の
ルーツと言われ、根拠あるケアプランを
作成するための指針であるMDS(Mini-
mum data set)方式が、このたびイン
ターライ(InterRAI)方式に刷新され
その日本版が同日公開されたことを受け
開催された。

日本の介護環境に即した アセスメントツール

世界30か国の研究者が参加している研
究組織であるインターライでは、国際標
準のアセスメント手法の開発を行なっ
ている。インターライの開発した従来のM
DS方式では、在宅ケア版、施設ケア版
に分かれていたが、その発展版にあたる
最新の「インターライ方式」では、各版
の情報共有を促進し「コア項目」+「固
有項目」というモジュール式に作り変え
たことで、ケアの連続性がより保たれる
形になっている。

アセスメントツールを導入することに
より、適切に利用すれば誰がやっても同
じケアプランを作成することができ標準
化に役立つ、利用者に根拠をもつて必要
なケアプランを説明できる、新人でも適
切な課題を抽出でき見落としがない(新
人教育に役立つ)、など利点も多い。

最新版では、実際の介護現場で有用な
ツールとするため、前版で必要ないと考
えられた項目を削除し、新たに①痛みの
種類、②利用者自身の回答を把握する項
目、③自動車の運転、が追加されるなど、
アセスメント項目もブラッシュアップさ
れた。

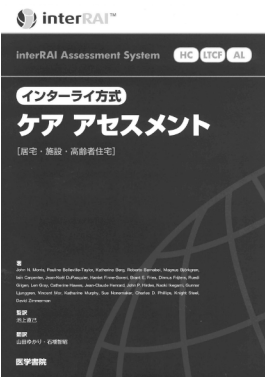
また日本版では、日本独自の試みとし
て居宅・介護施設・高齢者住宅のいづれ
でも使用可能なインターライ初の「統合
版マニュアル」とした。事業者間で互換
性がある形式とし、居宅から介護施設に
ケアの場が移行した場合でも同じものさ
しで評価できる仕組みであるため、必要
となるアセスメントやケアも連続して行
なうことが可能になっている。

インターライ日本理事長であり、この
たびの日本版インターライ方式策定の中心
となった池上直己氏(慶応義塾大学)
による特別講演では、上記のような最新
版の主な変更点と、インターライ方式の
特色が紹介された。

アセスメントツールを現場で活かす

第2部では、ワークショップとして実
際にこれまでMDS方式を導入してきた
6事業者により、報告「私たちのアセス
メントツール活用術(司会：東洋大学・
高野龍明氏)」が行われた。MDS方式に
は、客観的・体系的に情報を収集でき、
合理的にケアプランを作成できるという
利点があるが、「面倒」「時間がかかる」
といった理由から、実際に利用に二の足
を踏む施設も少なくない。なぜ困難と言
われるMDS方式に取り組んだのか、その
理由や、勉強会の開催など、現場で活
用していく上での取り組みが各事業者か
ら語られた。

また、新しいインターライ方式への期



『インターライ方式
ケアアセスメント
居宅・施設・高齢者住宅』
著: John N. Morris / ほか
監訳: 池上直己
訳: 山田ゆかり / 石橋智昭
A4版・368頁
2011年12月発行
定価3990円
(本体3,800円+税5%)

待と、利用にあたっての考え方もさまざ
まな角度から述べられた。

同日開催された日本MDS学会総会
は、学会名称の「日本インターライ・ケ
ア研究会」への変更を決議。介護の質の
さらなる向上を目的に、世界標準のイン
ターライ方式の普及を積極的に進めるこ
とが打ち出された。